

雑報

雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 1
ページ	6 0 - 6 5
発行年	1894-11-28
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/4477

○明治廿七年の天長節

萬世一系の皇位を踐み、金甌無缺の瑞邦に君臨し給ふ我 允文允武なる天皇陛下には、清國の隣交を破りたるを赫怒し給ひ、茲に宣戰の 詔勅喚發せられ、王師韓山渤海に進み、大靄廣島に下る。爾來畏多し。

陛下には、宵衣肝食、親しく軍機を裁可し、政務を總攬し給ふ。是は於てか連戰連勝、古今東西に比類なき克捷を得て、皇威四表に耀々たり。この時に當り吾人は茲に謹んで 陛下の御誕辰の佳節を祝するを得、此の如きこと眞に未だ曾てあらざる所、吾人は本年の天長節に際し特に熱誠の切實あるものあるを感せずんばあらず。明治廿七年十一月三日、旭曦盪々、秋風颯として清く、爽晴轉た適あり、午前九時三十分、職員生徒一同式場に參列、全四十分開扉、此時最敬禮、秋月欽授恭しく 教育勅語を捧讀せられ、次て一同拜賀の式あり、終りて中川學校長演說せらる、先づ祝辭を述べて後『一分の下るや、數萬忠義の士は或は異域に虎豹を斬り、或は外海に龍蛇を屠り、海に陸に、遠く敵地に入りて勇闘奮進し、戦へば勝ち、攻むれば取る。此勢を以てすれば、北京城頭旭旗の翻々たるを觀る、亦た將に遠きにあらざるべし』と說破、鼓氣一番して『此の一大重事の時に際し、諸子か閑かに學窓の下に業を修むるを得るは何ぞや、是れ一に 皇上の御聖德によるにあらずや』と斷言し、日清戰爭は正を顯はし、義を輝すべきものにして、我國民は將來永く帝國の威嚴を中外に宣揚し、平和を維持すべき大責任を有するものあることを詳論を、終に『此大責任を負ひ、我國將來の指導者となり、能く此任を全せしむるものは果えて誰ぞ。諸子の任や重し、撓むあとなく屈することなく、ますます勉めますます勵み、以て聖德に答へ奉り、以て我國の光榮と實力とを中外に發揚せよ』と結論せられ、聲激し語強く、爲に聽く者動く。是に於て、學校長に和して 天皇陛下並に 皇后陛下の萬歲を祝し奉り、次に我校の萬歲を唱へ、終りて閉扉、此時最敬禮。之にて式を終り、食堂にて一同に茶菓を配ち散會せり、時に十時三十分なりき。

○秋期行軍、得る所果して如何

甲午秋期行軍は十一月五日に始りて全十九日に終れり。時に秋風颯として冷に、大空碧として清し、眞に名山に攀ち、大河を渉り、勝地を探るべき好時節なり。且つや旅順の港灣海濤騒ぎ、鳳凰の城頭戰塵揚るに際す、吾人は武を練り、軀を鍛ひ、以て元氣を振起する必要を感ず。然り、吾人の元氣は大にしては國家の元氣たるべく、小にしては我校の元氣たるべし、吾人が平素養成せる元氣を一層活潑々たらしめんとせる、眞に好機に投合せるものと謂つべし。殊に見聞を博ふし、知識を啓發し、學問を活動するを得たるは、吾人が忘却し去らんと欲して能はざる所。島原城頭懷古の所感如何。瓊浦灣頭見聞せる所如何。水雷の爆發、操江號の觀覽、英國旗艦センチリヲン號の光景、街上に彷徨せる辮髮奴、乾燥し了れる水道貯水池の狀況等に就て如何ある觀察をかあせる。大村に於ては如何ある新事實を得じか。佐世保軍港に於て學び得たる所は如何、郡司大尉の千島談は如何ある感覺を與へしか。平戸島に於て見聞せる所如何、白岳頂上遙かに對州韓地の陸影を望見せる時の感慨如何、古昔の外國貿易に關して何をか聞き得たる。小城、佐賀、柳河に於ては如何。海洋島戰沒者を祭り、又非命の最後を遂たる故山本固一郎君を吊へる時の感果して如何。嗚呼諸君は問ふまでもなく、萬事に於て得たる所尠少にあらざるべし。吾人は諸君と苦樂を共にし、寢食を全ふして、以て心に得、軀を健にし、勃々たる銳氣を振起するを得たることを喜ぶ。嗚呼行軍あるうぢ、行軍あるうぢ。行軍の愉快と利益とは、吾人永く之を忘却することを得ず、又行に加はらざりし者の想像の及ぶ所にあらず。今回の行軍に就ては今之を詳記せず、ろは記事の梗概は次號の紙上に掲載すべければあり。

○恤兵部献金

曉起列を整ふ。時に東天僅に白く、四隣寂として聲あし、風は面を拂ふて寒く、曉星微光を放ちて天冷がなる覺ゆ。既にして旭光朗かに四方の山頂を照らし、雀鴉漸く喧噪する時、四邊を顧むば霜白とて

と雪の如く、手廻り、足冷かなり。是時に當りて、韓山に起臥し、瀋州に奔馳せる、我が忠勇なる軍隊の状況果て如何。想偶々此に至りて、慨然たるもの之を久ふす、是れ吾人が前肥の山河を跋涉せる時、日毎に感したる所にあらずや。吾人は彼等の辛苦艱難を切に思ひ、翻て自家の平安を願れば、一片全情の念あからんとするも得む。我校恤兵部献金の事と、十月十日の紀念會當日に提議せられ、全校一致して之を賛同し、行軍發程前全く其手續を了せり。集むる所固より吾人の節約せるものより出で、其額多き上る能はざりしと雖も、その精神に至りては、在韓軍隊の勤勞を慰藉し得て十分ありと信ず。

○炊事委員の精勵

日清事件以來、各地の諸物價は日よ月に騰貴し、殊に熊本の如き師團屯在地を以て最も甚しとす。因て吾人は、我が自炊も其影響を受け、食費著しく價格を高むるは、自然免る可らざるものありと豫期したり。然るに今日までの成績に因りて之を徴すれば、價格の差異従前に比えて甚しからざるを知る。是れ一に炊事委員諸氏が、精勵以て事を執り、力を盡すこと周到なるに因らずんばあらず。希くは一層奮勉して自炊の効果を著しからしめんことを。至嘱々々。

○龍南會東京支部會記事

支部委員 無 名 子 投

十一月十日第十一回龍南會東京支部通常會を上野韻松亭に開く。午後六時集る者五十名、嘉納、潮田、矢津の三先生皆差岡臨席なりしは遺憾ありし。聽て會員の大半は室の諸隅に割據し、彼處に日清の輸贏を飛車、角、桂馬に決するの勇將あれば、此處には四百餘州を黑白盤面に併吞せんとする策士あり。或は近着の龍南雜誌を繕ひて郷校紀念會の景況を批評し、彼の地吾人が兄弟の活潑勇壯あるを歎するもあり。既にして淡茶出て煎餅來る。拍々婢を呼ぶ聲、齧々煎餅を齧ふ音、相錯はり、其間時に「モノトニー」を破るものは好謔家の「ワマカシ」端なく衆員の聲帶をして震はしむるにぞある。偶々見

る、室の一隅委員の机上木筆幾十となく排列せられ、傍ら又白紙の小片數百枚疊積せられたるを。是れ果して何をか意味する。衆員皆怪める色あり、交々委員を呼んで其由を詰る、委員微笑故らよ秘して發せず。衆益々訝かり、或は來りて紙筆を捻り、或は左右を顧みて耳語し、或は領し、或は黙し、悟り顔に莞ひ者、沈思眉を蹙ひる者、清したる者、嗤ふ者、起つ者、坐する者、空囁く者、欠伸する者、百態千狀、正に是れ一興醒め去りて他興復將さに土を卷いて來らんとする一刹那、委員某衆目簾注の間に一紙を手にし起たんと欲して復躊躇す。忽ち聞くボーンの一聲、陰々として巨鯨の吼るが如く耳を掠めて過ぐるもの、此は是れ東台の脱鐘后八時を報するあり。最早躊躇ふへきにあらざれば委員某乃ち起立、詳細に掌裡の秘事を説明し畢り、「チャンピオン勝負」ある遊戲是より將さに試みられんとす。四十有六の碁子黑白等分ふ混せられたり、是より委員は化して「アマバイア」とあれり、「アマバイア」は一々碁子を撥り出して衆員に賦れり、黑白の兩隊是に於てか一定し、木筆頒たれ、紙片配られ、兩隊各其秀英を選出し、「チャムピオン」の雌雄を決するおと十餘番。黑隊初め甚だ強かりしが、白隊中る殆んど全く衰勢を挽回し、此間喊聲屢起り、雙方互角の勢とありしも、遂に關ヶ原の一戰、全局の勝利は黑隊の占むる所とあれり。此時黑隊が今まで勝利に就て渴せし喉より發せる喊聲雷の如く四隣の窓戸皆震ふ。憐れ白隊は勝ち矜りたる黑隊の「チャンピオン」の強請に應え、一人を抽ぎ、靜御前の其あらで鬼搦り挫く益荒夫の龍南固有の劍舞を演せざるべからず、二人を撰んでは亡國の歌を吟せざるべからず。龍南男子！武士は死んでも櫻色！饒令へ烏江の敗ありとも豈に卑屈沮喪して空く虞氏の別を演せんや。白の鉢卷、檜の木劍、現はれ出たるは玖摩川以北其人ありと知られたる某氏。淡茶一服喉を混え、吟せんと欲して先づ容を斂めたるは、嘗つて美聲を以て龍巒白渾の黃鸝兒を泣らしめたる某々兩氏。『宜シイカ』——『宜シ』——衆皆片唾を嚥ひ。坐中忽ち現出す一幅の活「パノラマ」、千山萬壑は波濤を爲えて大天を摩し、溪間一縷路纔かに通するの處、鸞輿過き去りて後、唯看赳々たる一武夫、『單箕直入虎狼窟、一匕深深鯨鰐淵』、空拳を喫て獨力を嗟くの間、舞臺一變、朝日に響ふ大和心の

山櫻、快刀一剗樹皮を去り、兩行字成て血淚敷行潛々として征衣を沾したるころ優しくも又勇ましく
れ。其間某々兩氏の喉を假りて來れる鬪曉たる天樂は間斷なく、或は急雨とあり、或は私語とあり、其
揚るや「銀瓶忽破水漿迸 鐵騎突出刀鎗鳴」其歛るや「間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘、」一坐茫然暫
く語無し。かくて屋島の戰に追詰められたる白隊は扇を舷頭に掲げて我を壓きたるあり。黒隊は既に
勝てりと雖も豈に一矢の以て相酬ゆるをかるべけんや。是に於て劍舞の那須與一たる某氏は黒隊よ
り推されて、場の中央に出で、九郎判官たる某氏の聲に應じて劍を抜き地を斫て舞へり。遠がは多年
鍛へし腕の迄へ、發矢と要めに中れば扇は飛んで中空蝴蝶舞ひ、黒隊は簾を打ち、白隊は舷を扣いて
暫しは鳴りも已まざりけり。復しも聞ゆる東台の鍾、數ふれば早や九に加ふる一、之を相圖に兩軍交
々綏え、不忍池畔黒となく、白ともなく、三々五々皎々たる月下、各々家路を指してぞ歸りける。
編者曰く、「チヤンピオン」勝負の説明は之を次號の紙上に紹介すべし。新奇ある工夫の中。如何あ
るものをか寓する。刮目して之を待て。

○本校大學豫科各年級志望學科別 (明治廿七年十月三十一調查)

學科別		大學豫科三年級		全二年級		全一年級		學科別		大學豫科三年級		全二年級		全一年級	
法	律	二	二	一	六	三	二	地	質						
政	治	六	六	二	四	二	九	小	計					四	一
小	計	二	八	四	〇	六	一	土	木					一	二
哲	學	五	五	七	七	九	五	機	械					五	一
國	文				一			造	船					一	五
漢	文	六	六					造	兵					一	四
國	史			一		三		電	氣					一	四
史	學	五	五	四		八		造	家					二	一
博	言							應	用					二	三
英	文			六		五		火	藥						

獨文	佛文	小計	數學	星學	物理學	化學	動物	植物
		一四				四		
		一九	二			一		
		三四	三			一		
探鑛冶金	小計	農學	農藝化學	林學	獸醫	小計	三部	總計
四	二五	三	一	二		六		七七
	二二	四		一		五		九〇
五	五〇	五		一		七	二七	一八四

○寄贈誌雜

○校友會雜誌第三十九、四十（一高校友會）○尙志會雜誌第七（二高尙志會）○學友會雜誌第十四（造志館學友會）○錦溪第十六、十七（九州學院錦溪書院）○風藻第一（猶興館弘道會）○學術講談會雜誌第三十二第三十三（岐阜中學全會）○保惠會雜誌第四十三（愛媛中學全會）○同窓學會雜誌第二十七（嶋根縣第一中學全會）○同窓會報告書第八（福嶋中學全會）○校友會々誌第七（秋田中學全會）○研瑤會雜誌第十（長崎醫學部全會）○矯々社雜誌第十五、十六（明善校全社）○少年文庫（第十二卷二號）（少年園）以上は本校年に於て今日までに落手せるものあり。

